

## 丘

宮沢賢治

森の上のこの神楽殿  
いそがしくのぼりて立てば  
くわくこうはめぐりてどよみ  
松の風頬を吹くなり

野をはるに北をのぞめば  
紫波の城の二本の杉  
かゞやきて黄ばめるものは  
そが上に麦熟すらし

さらにまた夏雲の下  
青々と山なみははせ  
従ひて野は澱めども  
かのまちはつひに見えざり

うらゝかに野を過ぎり行く  
かの雲の影ともなりて  
きみがべにありなんものを

さもわれののがれてあれば  
うすくらき古着の店に  
ひとり居て祖父や怒らん  
いざ走せてこととふべきに

うちどよみまた鳥啼けば  
いよいよに君ぞ恋しき  
野はさらに雲の影して  
松の風日に鳴るものを

Добавлено примечание ([CK1]):

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房  
1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

## セレナーデ 恋歌

宮沢賢治

江釣子森の右肩に  
雪ぞあやしくひらめけど  
きみはいまさず  
ルーノの君は見えませず

夜をつまれし枕木黒く  
群あちこちに安けれど  
きみはいまさず

とゞろにしばし行きかへど  
きみはいまさず  
ポイントの灯はけむれども  
ルーノのきみの影はなき

あゝきみにびしひかりもて  
わが青じろき額を射ば  
わが悩めるは癒えなんに

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房  
1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

## 〔われ聴衆に会釈して〕

宮沢賢治

われ聴衆に会釈して  
歌ひ出でんとしたるとき  
突如下手の幕かげに  
まづおぼろなる銅鑼鳴りて  
やがてジロフォンみだれうつ

わが立ち惑ふそのひまに  
琴はいよよに烈しくて  
そはかの支那の小娘と  
われとが潔き愛恋を  
あらぬかたちに歪めなし  
描きあざけり罵りて  
衆意を迎ふるさまなりき

そを一すぢのたはむれと  
なすべき才もあらざれば  
たゞ胸あつく頬つりて  
呆けたるごとくわが立てば  
もろびとどつと声あげて  
いよよにわれをあざみけり  
このこともとしわが敵の  
かの腹円きセロ弾きが  
わざとはわれも知りしかど

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房  
1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

※ [] 付きの表題は、底本編集時におこなわれたものです。

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

## 幻想

宮沢賢治

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
(例) 炭《たん》

濁みし声下より叫ぶ  
炉はいまし何度にありや  
八百といらへをすれば  
声なくて炭《たん》を搔く音

声ありて更に叫べり  
づくはいまし何度にありや  
八百といらへをすれば  
またもちえと舌打つひゞき

灼熱のるつぼをつゝみ  
むらさきの暗き火は燃え  
そがなかに水うち汲める  
母の像恍とうかべり

声ありて下より叫ぶ  
針はいま何度にありや  
八百といらへて云へば  
たちまちに階を来る音

八百は何のたはごと  
汝はこゝに睡れるならん  
見よ鉄はいま千二百  
なれが眼は何を読めるや

あなあやし紫の火を  
みつめたる眼はうつろにて  
熱計の針も見わかず  
奇しき汗せなにうるほふ

あゝなれは何を泣けるぞ  
涙もて金はとくるや  
千二百いざ下り行かん  
それいまぞ鉄は熟しぬ

融鉄はうちとゞろきて  
火花あげけむりあぐれば  
紫の焰は消えて  
室のうちにはかにくらし

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房  
1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

## 対酌

宮沢賢治

嘆きあひ 酌みかふひまに  
灯はとぼり 雑木は昏れて  
滝やまた 稜立つ巖や  
雪あめの ひたに降りきぬ

「ただかしこ 淀むそらのみ  
かくてわが ふるさとにこそ」  
そのひとり かこちて哭けば  
狸とも 眼はよぼみぬ

「すだけるは 孔雀ならずや  
ああなんぞ 南の鳥を  
ここにして 悲しましむる」  
酒ふくみ ひとりも泣きぬ

いくたびか 鷹はずだきて  
手拭は 雫をおとし  
玻璃の戸の 山なみをたど  
三月の みぞれは翔けぬ

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房

1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

※底本は、「作者専用の詩稿用紙に書かれた詩篇を収録し」、多くの詩篇で、詩稿の形式に合わせて上下に二句を配置し、字間スペースなどを調整して下の句の頭が横にそろるように組んである。この形を取っているこの詩篇では、句間を最低全角2字空けとし、下の句の頭を横にそろえた。

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

## 〔せなうち痛み息熱く〕

宮沢賢治

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
（例）学生《がくしやう》

せなうち痛み息熱く  
待合室をわが得るや  
白き羽せし淫れめの  
おごりてまなこうちつむり  
かなためくれるベンチには  
かつて獅子とも虎とも呼ばれ  
いま齒を謝せし村長の  
頼明き孫の学生《がくしやう》を  
侍童のさまに従へて  
手袋の手をかさねつゝ  
いとつゝましく汽車待てる  
外の面俤の往来して  
雪もさびしくよごれたる  
二月の末のくれちかみ  
十貫二十五銭にて  
いかんぞ工場立たんなど  
そのかみのシャツそのかみの  
外套を着て物思ふは  
こゝろ形をおしなべて  
今日落魄のはてなれや  
とは云へなんぞ人人の  
なかより来り炉に立てば  
遠き海見るさまなして  
ひとみやさしくうるめるや  
ロイドめがねにはし折りて  
丈なすせなの荷をおろし  
しばしさびしくつぶやける  
その人なにの商人ぞ

はた軍服に剣欠きて  
みふゆはややにうら寒き  
黄なるりんごの一籠と  
布のかばんをたづさへし  
この人なにの司ぞや  
見よかの美《は》しき淫《たは》れめの  
いまはかなげにめひらける  
その瞳くらくよどみつゝ  
かすかに肩のもだゆるは  
あはれたまゆらひらめきて  
朽ちなんいのちかしこにも  
われとひとしくうちなやみ  
さびしく汽車を待つなるを

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房

1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

※ [] 付きの表題は、底本編集時におぎなわれたものです。

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。